國學院大學学術情報リポジトリ

編集後記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進センター メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2302

編集後記

本「紀要」第四号には、神道・国学関係の論考と併せ、持続可能な地域社会と平和な世界の構築に関する総合学であり地球的共存の提言を目指す試みである、本学の学際研究事業「共存学」に関する論考をも掲載した。合計十四本の論考は、こうした学的範疇に於いて、それぞれ斬新な問題意識に従って執筆されたものである。

巻頭に据えた時枝論文は、群馬県高崎市の頼政神社境内にある招魂碑を取り上げ、幕末・明治初期の内乱にともなう高崎藩を中心とした慰霊のあり方を検討し、その背景に旧藩意識の存在を指摘した力作である。

松本論文は、宣長以前を含めた国学研究全体における霊魂観の生成・展開を論ずるべく、荷田春満の神祇道徳説にはどのような他界観や霊魂観が提示され、それがどのように実践に反映していったのか、といった問題を明らかにしている。

中野論文は、戊辰戦争から日清戦争に関わる招魂祭詞に着目し、当該招魂祭詞に見出される霊魂観と、近世国学者の霊魂観との近似性を指摘することによって、戦歿者を神に祀る信仰を、神道の正統な信仰の在り方として論証している。

藤田論文は、日清・日露戦争後における神仏合同招魂祭の実態について考察したもので、従前の神式＝「顕彰」、仏式＝「慰霊」という「二項対立」的理解に再考を促している。

太田論文は、近世初頭の十七世紀後半に日本各地で起った神仏分離の動きに関して、賀茂別雷神社の社家供僧相論を題材として考察し、その要因を経済問題の中に探ったものである。

宮本論文は、文学御用掛としての福羽美静と近藤芳樹との事績を辿り、「御歌所」の前身となった諸掛の動向を考察したものである。

武田ノートは、明治七年に伊勢の神宮大宮司となり、祭神論争では伊勢派の代表格となった田中頼庸について、主に教化に焦点を絞りながら、彼の思想を論じたものである。宮本論文と共に、従前、論じられることのなかった領域であろう。

船井ノートは、都市化とともに人口増加が続く用賀地域に於いて、氏子組織と地域住民との関係について、考察を試みている。

「共存学」関係の論考の最初に据えた古沢論文は、人類の歴史を俯瞰したうえで、現代の世界が直面している諸課題について、共存社会の視点から考察した論考である。とくに地球温暖化問題とその対応をはかるＣＯＰ15気候変動会合に参加しての状況分析とともに、新たな世界枠組みが形成されつつある動きを論じている。

高橋論文は、中国の急速な大国化によって、アジアにおけるパワーシフトが生じていることに鑑み、日本と中国の間には「抜けないトゲ」があるが、協調と競争によって「共存」することがアジアの経済発展と安全保障のために死活的に重要であることを力説している。

冬月論文は、韓国で開かれた「日韓市民社会フォーラム」における「農村集落と公共事業、産業」、「農村集落と帰農帰村、農村創業」、「農村集落と有機農業、伝統文化」活動内容を「共存学」の視点から報告・考察したものである。

康論文は、経済のグローバル化は国家間の貿易経済摩擦を多発させていることに着目し、その直接的な原因である輸入過大評価について、その発生背景とそれがもつ現実的意義を実証的分析で明らかにしている。

重村論文は、エネルギー、食糧、気候変動などの諸課題に対して、リサイクル活動などの資源循環への取り組みを通して、これからの持続可能なまちづくりの可能性と課題について考察を行なっている。

河原論文は、社会関係資本についての考察であり、人と人、集団内の紐帯によって形成される社会関係資本をめぐって、その概要を整理すると共に、新たな社会関係資本の醸成の可能性を提示している。

最後に、本センターの活動にあたって、院友神職会をはじめとする神社界からの多大なご支援を賜っていることを、重ねて感謝申し上げます。

（中野）